

「ピンクのキリギリス (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

ショウリョウバッタやトノサマバッタ、それにカマキリ類など草地に住む昆虫は、ほとんどが体全体が緑色をしている。捕食する側の虫も捕食される側の虫も、保護色として役立っているのだろう。しかし時に、自然はものすごい「イタズラ」をすることがある。



10月3日の朝のNHKニュースで、「珍しいバッタ、長野の小学生が大発見」という特集を放送していた。出勤前の忙しい時間帯だったが、思わず画面にくぎ付けになってしまった。



この「虫好きの小学生」が発見したのは、何と「全身がピンク色のバッタ」だという。

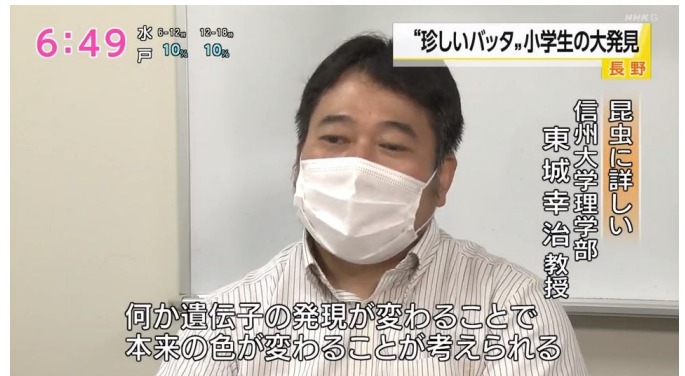


すぐに専門家の解説が入るところが、実にNHKら

しい。信州大学の東城教授によれば、「ショウリョウバッタのメス」だという。



教授の説によれば、「突然変異」によって緑色を呈する色素が抜けることがあるという。



また「何らかの遺伝子の発現」の変化によって、本来の色が変わることもあるという。しかしこの「ピンクのバッタ」、意外にも本校の1年生も発見していた。



9月下旬に1年生の校外学習を実施した。子どもたちの興味に応じて「ものづくりグループ(下町のお皿づくり)」「科学グループ(科学技術館での活動)」「鉄道博物館と新幹線グループ」それに「虫グループ」の4つである。私はなぜか「鉄道グループ」の担当だった。「虫グループ」は、多摩川の河川敷で、専門家と一緒に虫とりを楽しんだ。そのグループに参加した子ども一人が「ピンクのバッタ」を発見したのだ。